

令和元年度

第4回草津市子ども・子育て会議 会議録

■日時：

令和元年10月28日（月）9時～12時00分

■場所：

さわやか保健センター1階 視聴覚室

■出席委員：

神部委員長、奈良副委員長、中島委員、井戸田委員、菅野委員、卯田委員、
井上委員、橋本委員、杉江委員、西村委員、高城委員

■欠席委員：

土田委員、高尾委員、田中委員、横江委員、上田委員、蜂須賀委員、渡辺委員、高
木委員、今村委員

■事務局：

岩城子ども・若者政策課長、門田子ども・若者政策課長補佐、大隅子ども・若者
政策課主査、佐藤子ども・若者政策課主任、子ども家庭課、幼児課、子育て相談
センター、幼児施設課、発達支援センター、家庭児童相談室

■傍聴者：

0名

令和元年度第4回草津市子ども・子育て会議

1. 開会

＜委員20名中11名の出席をいただき、事務局より開会宣言＞

＜草津市民生委員児童委員協議会の樋笠委員から、同協議会より今村委員へ委嘱されたことを事務局より報告＞

2. 議事

(1) 第二期草津市子ども・子育て支援事業計画

①前回の会議での意見反映及び対応

【事務局】

＜資料1、2に基づき説明＞

【委員】

資料2の86ページで適応指導教室の実施・スクールカウンセラー相談事業の削除というように変更しているが、これはほかの事業に変わったのか、この事業自体が削除になったのか、どちらなのか。

【事務局】

この点について、同ページの112番にやまびこ教育相談室の実施ということを挙げており、適応指導教室とやまびこ教育相談室は同じ意味のため、今回112番に集約した。

また、スクールカウンセラーの相談事業については、県の事業ということで、市の事業としては掲載せず、県の事業として継続して取り組んでいただく。

②「重点的な取組（法定必須記載事項）量の見込み」

【事務局】

<資料3に基づき説明>

【委員】

資料3の18ページの放課後児童育成クラブについて、量の見込みで4年生以上は人数が減っているが、4年生以上は自ら望んで退所しているわけではなく、定員の問題で退所させられることが多々あり、量が足りてないから減少している。減少すると、友達がいらないため5年生、6年生の子は、家庭の状況により受入れてもらえるが、「じゃあ、僕もやめるわ」という形で自主的にやめる方もおり、どんどん減少に拍車がかかっていると考えている。しかし、5年生、6年生は幼いところが多々あり、特に夏休みに1人で留守番させると、外でふらふらしている子や、マンションのエントランスに集まって怒られている現状をよく見るため、見込み量としては、潜在的に倍以上あるのではと考える。

【事務局】

児童育成クラブの学年が上がるごとの減少率については、過去の実績から出てきたものであり、市全域14小学校区を全て合わせた率をもとに出している。学区別に見ると、4月には低学年が中心のクラブもあれば、高学年も入所しているクラブもあり、地域によって利用する学年に少しばらつきがあるというのが現状である

しかし、ご意見があったように、やはり友達が利用するのかという点が非常に大きく影響していると感じる。実際窓口でも、友達が少なくなってきたので、退所するという声を聞く。

草津市は利用希望があれば6年生まで確保するという一方で、施設整備を行っているが、入所希望者が非常に増えている現状もあるため、低学年を中心に優先的に入所決定をしている。相関関係はうまく説明できないが、利用は可能だが、

やはり留守番ができるとか、習い事が増える、友達がやめるのでやめる等様々な要因があり、高学年になっていくほど利用率が減っていったのが現状である。

【委員長】

これは、4年生以上は入りたい、残りたいという子どもがいたら、全員受け入れられる体制になっているのか。以前は、4年生以上は余裕がある部分に関しては受け入れるということだったと思うが。

【事務局】

施設整備については、6年生までを量の見込みということ考え、施設整備を毎年行っている。令和元年度の1,708名に対し、施設整備としては1,758名分の定員を市全体では確保している。

草津市には14小学校区で一つずつ、公設児童育成クラブがある。それとは別に、民設児童育成クラブが15施設ある。同じクラブの中で、1年生から6年生の中でも低学年のほうを優先的に入所決定している。そうすると、例えば公設で60名までの定員の施設があったときに、順番に1年生から入所することになるため、低学年で定員が埋まってしまい、高学年になると他の民設のほうに移っていただくというようなことが出てくる。その際、施設が変わり、慣れた環境から変わることもあるが、高学年の方にはそのようなお願いをしているのが本市の現状である。

【委員】

私の子は公設に入っていた。今話を聞いて、民設に希望を出せば移れたかと思う。

【事務局】

今話を聞くと、周知の面で課題があると考えます。

施設にも協力いただきながら、きめ細やかな周知に努めていきたい。

【委員長】

PRというか、こちらの施設にはまだ余裕があるといったような一言があれば問題も出てこないのでは、課題として認識いただきたい。

また、この部分に関しては、放課後子ども教室も含めて、特にこれから新しいプランの中で子どもの貧困の問題というものを扱う場合に、重要なポイントでもあると考える。特に子どもたちの体験の格差、学力の格差というものがそのまま貧困の再生産というのを産んでしまっているというところ、これはデータとして出ており、特に学力に関しては子どもたちの体験、様々な体験をやった子どもほど、学力との相関関係というのがあり、そういう意味では貧困対策としての経済的な支援ということだけではなくて、やっぱり子どもたちの教育支援ということを考えるときに、放課後子ども教室が1箇所での実施ということがよいのか疑問に思うところ。特に、放課後子ども教室は、市によって違う。

京都の放課後子ども教室は、学習が中心のところもあれば、地域の方々にお世話になり、子どもたちに様々な地域の体験をしてもらうといったところもあり、両方の形がある。体験量の少ない子が、様々な体験を積むことで、その子の学びの力というものを高めていくという側面もあり、家で宿題や勉強をする環境が整えられない、そういう子ども達がこういった場で学びの習慣というものを身につけていくことで、進学という部分を乗り越えて、貧困という連鎖から脱していくという意味で、このあたりの部分を草津市としても考えてもよいのではないかと。

草津市だけでなく、滋賀県全体が非常に低空飛行というところがある。実施するにも人がいないという話を聞くが、施策として必要なのかを考えるべきで、必要であるなら実現していく努力というものをすべきだと考える。

今後、次のプランで貧困という部分が入ってくるのであれば、貧困家庭の子どもたちの学びや体験といったものを、どのように草津市として支えていくのかという視点を市として重要視すべきであるし、そうなったときに果たして数値目標

としてこれでいいのかどうか、その辺は連動していくべきと考える。そのあたりを踏まえて検討いただきたい。

【委員】

資料3別紙の国の動きについて、子育て安心プランが2年前倒しとなっているが、そのようになった背景と無理な整備となっていないのか、なぜ草津市として対応すべきかを説明いただきたい。もう1点、0歳児のところ、ニーズ調査としては高すぎた値が出て、実績と乖離があるため実績に合わせましたという説明があったが、ニーズ調査が高かった背景を説明いただきたい。

【事務局】

1点目については、国の子育て安心プランというのは、その前身に待機児童解消加速化プランというのがあり、これは、全国的に待機児童がたくさんいたということがあり、待機児童をなくしていくというプランで、平成25年から29年度まで実施していた。その後、このプランを受け、作られたのが子育て安心プランという形になる。消費税の増税等も含め、子どもへの支援を手厚くするという部分もあり、このプランが作られたが、当初は令和4年度末までのプランだった。そこまでに待機児童を全て解消するための整備という形で行っていたが、昨今の教育・保育の無償化等の子育て支援を手厚くするという国の流れの中で、待機児童をできるだけ早期に解消するとい意味も込められ、2年前倒しで整備されるという形になった。

しかし、令和4年度には待機児童をゼロにするために整備するといったことを2年前倒しにしているだけであり、整備数としては無理な整備という形にはなっていない。

2点目のニーズ調査で0歳が高い背景は、ニーズ調査の中で0歳は、保育の必要とされる家庭、先ほど家庭類型というものがあつたが、ひとり親や両親がフルタイムで働いている形の家庭類型の方々に利用意向を聞いたところ、0歳児の家

庭については100%利用したいとなった。その家庭類型が全体の中での一部の割合になるため、子ども全体の中での何%かという部分に割り戻すと51%になり、51%が保育利用意向という形で出てきた。

資料3別紙の保育需要率推計の表に記載している率については、10月現在の利用という形になっている。この差については、当初の計画から国でも示されているが、ニーズ調査の値というのは1年を通じたの需要量という形になっている。0歳につきましては、4月から生まれ、3月まで加算されていき、1年間で0歳児全員生まれるという形になっている。もし、これを全て51%というもので施設定員を用意すると、4月からずっと空いている状態が続き、3月にやっと全員入るといような状況になってしまう。そうすると、園の運営上、先生が預かる子がないのにずっといるという形になるため、大体年の平均の人数で需要率を見るというのが国のほうで示されている値になる。本市の場合は、10月で設定している。

率については、10月にこの率を見て、最後に3月まで追っていくと、大体50%前後の率で年度末までなるという形になるため、率としては大体10月の率ということで、ニーズ調査の率と一致していくという形になる。

最後に、それでは全て受け入れられないじゃないかという形になるが、そういった部分については企業の育休制度等を活用しながら入所という形になっていくため、そのような制度も啓発しながら、この率で定員を整備したいと考えている。

【委員】

資料3の別紙だが、令和3年度からは安心してよいということか。また、資料3の2ページのAタイプのひとり親とDタイプの専業主婦には括弧して夫と記載があるが、この違いについて説明いただきたい。

【事務局】

1点目の令和3年度には安心できるのかということだが、その印象があるのは、

資料の棒グラフが折れ線グラフより上回っているという形があると思うが、そうなるように令和4年度の量の見込みが棒グラフでいうと、一番高いところにあると思うが、これに対応できる部分をさらに前倒しで整備するという事で、希望の方全員に入ってもらえるよう整備しているため、大丈夫かと考える。

また2点目のAタイプ、Dタイプの違いについて、そもそもこの表は父母の部分と就業状況で分類を分けている。タイプAのひとり親というのは、本当に母親、父親のどちらか一方しかいない状況を示している。タイプDの専業主婦（夫）は、母親父親ともにおり、片方が働いていて、片方は専業主婦（夫）となり、働いていないという形で分けている。Dタイプは両方記載がなかったなので、わかりづらかったと考える。

【委員長】

よくわかるようにしていただきたい。

③第7章 計画の推進に向けて

【事務局】

<資料2に基づき説明>

【委員長】

133ページの図だが、PDCAサイクルをあらわすのに、Pが一番下にあるCAPDと見えるため、順番を入れ替えるべきではないか。

【事務局】

指摘のとおりなので、そのような形に修正する。

【委員】

131ページの連携・協働の図についてだが、6つの主体者が輪になって連携をとっているというのはよく見えるが、家庭が遠いところに感じる。この図がもう少しつながりがより近いもの、あるいは常にみんながつながっているとわかる

ものにならないか。

【事務局】

図については、より実情に近く、つながりや結びつきがよく見えるような形になるよう、再度検討したい。

【委員長】

要検討ということでお願いしたい。

(2) 子ども・若者計画

①これまでの審議を受けての修正点について

【事務局】

<資料4に基づき説明>

【委員長】

性の健康教育というのは、具体的にはエイズということか。

【事務局】

そのとおり。正しい知識の普及を、男女共同参画のほうで子ども達に学校授業等で派遣依頼いただき、授業を実施している。

②第3章 計画の基本的な考え方

【事務局】

<資料5、6に基づき説明>

【委員長】

資料6の基本理念については、前回は「全ての子ども・若者の活躍を応援するまち草津」として案で事務局より提示され、その際に出てきた意見を踏まえ、修

正した形が右側に記載されている。また多数意見をいただきたい。

まず確認だが、「生き活き」という言葉について「生きる」と「活」という字を組み合わせているのは、正しい日本語なのか、

【事務局】

本来は違う。ただ、「生きる」という意味の「生」と「活力」という意味の「活」の両方の「いきる」ということがわかるように、あえてこの文章で使用している。

【委員長】

気持ちはわかるが、行政文書で普段使用しない言葉を使うのは、この文章を読んだ人に対して、どうなのかという問題。言葉遣いとして「生きる」とその下のやる気あふれたみたいな活用のほうの「活きる」という、こういう言葉遣いがあればよいが。

【事務局】

「ゆるやかな生き方も尊重」の「生きる」と活力のほうの「活きる」については、辞書の意味から引用してきた部分がある。一方で、この文章中に「生き活き」とつなげると、造語として使用した部分もある。公文書的に問題があるのかという点、こういう意図で使うことに何か問題ないという点は、内部で確認し、適切な表現に改めたいと考えるが、このまま計画の意図を伝えるために問題ないという点についても、他の計画の表現でもそういったものがないかというところも含め、一度確認する。

【委員長】

「生きる」の表現が「ゆるやかな生き方も尊重＝生きる」ということでよいのかも疑問に思う。また、「活きる」についても、行政一般的には、例えば「活か

す」という場合に、活動の活を使うけども、公文書の場合は、国の方針でそうになっており、常用漢字ではない。すべて「生」の字で「生かす」という言葉を行政文書としては使用しないといけない等、そのような通知も出たり、この2つの言葉というのは非常にデリケートなところがある。そのため、この文章の中で生と活用が入りまじった「生き活き」というこの表現はどうだろうかとの疑問に思う。

または、ここは「生き活き」というのは、平仮名で使って、下に括弧書きで、ここにこういう意味を込めていると表現してはどうか。

【事務局】

今伝えたい思いは、さまざまな生き方が尊重されるという点のため、表現方法や説明をどのように加えるのか、漢字の使用方法について内部で再確認し、必要なら修正を行う。結果は次回の会議で伝える。

【委員】

生き活きという言葉の間に「・」を入れて「生き・活き」としてはどうか。英語でも2語使用する場合は単語と単語の間に点を打つことがある。

しかし、草津川跡地公園において、「d e 愛ひろば」という言葉を使用している。「あい」という字を「愛」で表現している。このように、何か文字独特の表現をしたいのであればよいとは思いますが、「生き活き」というのを多様に表現したいのであれば、点を打つか、英語で考えてみるという手法もある。委員長の言うとおり、公文書であるので疑問を引き出すような文章にすべきでないのでは。

【委員長】

どうしても独特な言い回しを使用したいのであれば、せめて「」（鍵括弧）をつけたりしてはどうか。今回の場合、読み方によっては誤解を生む可能性がある。

【事務局】

今の意見を踏まえ、表現を修正する。

【委員】

この「夢」という言葉だが、若者と話をすると、「夢は持たないといけないのか」という方が多い。例えば、ひきこもりの人は夢をどう見る、どのような夢を見るのかという部分において、夢見ることは非常に重要だが、全員が全員夢を持たなくてもいいと考える。夢は持ったほうがよい。しかし、夢は叶わないかもしれないということは、大人が言うべきことでもあるため、言葉として重すぎるのでは。どちらかというところ、若者の活躍を応援するほうがずっとよいのではと感じた。

【委員】

教育現場でも「夢」という言葉は使用しがちではある。私自身は「夢」ではなく、より身近なもの、一人一人に当てはまるものということで、人前で話すときは「目標」という言葉を使った。私は、夢というのは、遠い先という部分もイメージしており、目標という言葉に置きかえたときに、それが当てはまるのかわからないが、身近な部分では目標かと考えた。それが叶うと大きな夢に繋がっていくと理解している。

【委員長】

夢というより、もう少し身近な表現のほうが受け入れやすいということかと考える。せつくなので、委員全員の意見を聞きたい。

【委員】

これが一番わかりやすいと思うが、私達が子どもの頃と違い、自分の子どもは、夢や希望はないと言う。人生に悲観的になってもおらず、趣味がないというわけではない。一番のポイントは、自分らしくというのが一番のポイントになるかと思う。

私もいい言葉は思いつかないが、夢や希望という言葉はいかかなものかとは感じている。

【委員】

しかし、ここの「夢」や「希望」という言葉がなかったらどうしたらいいのかというようにも思う。

【委員長】

なるほど。

【委員】

私は夢、希望という言葉が入っているのは、賛成である。しかし、夢「と」希望の二つが両立しなくとも、「や」とかでいいのではないか。ここにもう一つ何か、今、夢、希望以外の何かみたいなものを「や」で入れると入れやすいと思う。僕個人としては、何というかな、ちょっと平易な言葉だが、わくわくできるような。子ども・若者がわくわくできるような、そういう感覚を持てるようなものに。

【委員長】

わくわく。

【委員】

はい、できればいいんじゃないかなと思っている。そこに自分らしくというのも当てはまるなと思って、見ている。僕の中のキーワードは、「わくわく」かなと思っている。

【委員長】

皆さんに聞いてみたい。

【委員】

市が一生懸命何回も会議を開いてやって、最後に夢という言葉も希望という言葉も全然出てこないという文章は、ちょっと余りにも寂しい、本当の気持ち。今ね、今の若い人たちが確かに安直に夢とか希望とか口にしていないのは確か。確かだけれど、やっぱり市とかが、自分とこの市民の子どもたちに、このまちは自分のふるさとであるというふうな感覚を持って、いろいろなところへ快樂を含めて

飛び出してほしいとかいうようなことあるけど、それこそ、夢と希望というのは難しいけど、使わなくなることのちょっと反動というか、何かちょっと影響があるんじゃないかなと思う。

【委員長】

次の方、発言を。

【委員】

夢と希望といっても、さっきもおっしゃっていたような、夢がないというのが実際である。「うん」と言う人は、結構私の周りにも多くて、私が一番ここで思ったのは、自分らしくいきるまちといっても、自分らしいって何なんやろっというのがあって、自分らしくいきるまちって、自分らしいかわからへんのに、じゃあ、どうやって生きていくのみたいなふうにも思えた。

【委員長】

自分らしくというのも、じゃあ何なんだという。

【委員】

自分らしいって何ですかと聞かれて、わからへんというのが実際の答えにはなってくると思う。

【委員長】

なるほど、ありがとうございます。

【委員】

私は、くさつブースターズというところに所属させていただいているが、草津市をみんなで応援していこうという応援部隊というところに任命を受けている。その中で、いろいろと子どもさんに関わる活動等を、こちらから皆さんに届けている立場である。そのくさつブースターズの中に、自分で自分のことをドリームディレクターと呼んでいる者が仲間において、夢を私があなたたちにいろいろと提供しましょうという言葉を使っていらっしゃる方もいる。私たちが子ども

は、新年の書き初めという、夢、希望という字を書いていて、その希望という字が特賞をもらっていることが結構あった。希望とか夢って、そういうところに表現する字なんだなと、今、夢と希望を見て思わせていただいたが、持ってダメなものでは決してないと思っている。ある人にとっては、総理大臣になるのが夢だとか、世界旅行をするのが夢だというようなものを持って生きようという方であれば、宝くじが当たったらいいなとか、お年玉に1万円札があったらいいなとか、そういう現実的な夢を持っている人もいるかもしれない。夢という感覚は、人それぞれだと思う。持つ、持たないというところになると、誰も少しは、ちょっと欲望的な夢を持っているのではないかとも思うし、私としては、それがダメという感覚も、個々に表現してはダメという感覚も持ってはいけないものではないとするならば、別に夢も希望もあってもいいのではないかと思っている。

その前の、この生き活きの漢字について、一度触れさせていただくとすれば、一応私は、ラジオパーソナリティーをしており、さまざまな方がマイクの前にお立ちになるけれども、ぱっと原稿を見せられて、初見ですぐに原稿を読む場合に、言語・国語的能力が無いとかいうことを差しおいても、ぱっと見たときに「いきいき」と読めない。「自分らしく」まで読んだ後、これ何て読むんやろ、「なまき」かな、みたいな感覚になりかねない。この並びはちょっと難しいかなという思いが、原稿を読んだ場合の初見に対してのイメージとしてはあるような気がする。今、他の委員がおっしゃったように、点を入れて平仮名に変えるとか、または括弧を付けるといった表現力のほうが、読み手の側にとってはありがたいと思う。バラバラな意見で申しわけない。

【委員長】

ありがとうございます。

【委員】

夢と希望に関しては、私はいいと思う。やっぱり、おぎゃーっと生まれて、何

のために生まれてきたのかと思ったときに、やっぱり夢とか希望とか、陽気に暮せたら一番最高じゃないかなと思うので、そういうものをお持ちにならない方がたくさんおられるということを聞いて、今、びっくりしている状態である。できたらその方たちにも、夢とか希望じゃなくても、何か自分のお星さんを見て、きらきら光る、そういうイメージを伝えてあげたいなという気持ちにもなったし、今とっても寂しい気持ちである。夢と希望がないというのは考えられないのでね、古い人間かもしれないけれども。

もう一つ、ちょっと別だが、資料6の最初の、すべての子ども・若者の活躍を応援するまち草津と、これ読んだときに、ああ、うれしっと思った。これは受動的に捉えた。これだけ草津が応援してくれているんだなという。そして次に、2番の自分らしく生きるまちは、これは能動的に、あっ、自分がこうしていこうという草津なんだなと捉えたので、両方とも何か捨てがたい気持ちである。受け入れられてうれしかった草津と自分がやっても認めてもらえるという草津、そして次に一番下を見たら、ともに生きる草津と書いている。いや、これは自分だけじゃない、みんなと一緒に手を取りながらでも生きるまちなんだなという、そういう、ともに生きる草津なんだなというので、できたらこの3つを合算したような短い文で、どなたか御専門の方に考えていただけたらと、私は希望する。

【委員長】

なるほど、ありがとうございます。

【委員】

私の息子で考えると、夢と希望、息子の夢はユーチューバーで、eスポーツの世界大会に出ることらしく、ゲームが好きである。親としては、私のその狭い固定価値観ではなかなか応援しがたい夢だなんて思って見ているけれども、親として、何をすべきかなと思ったら、新しい代わりの夢を与えてあげないといけないなんて思って、動物園へ行ったりとか、水族館へ行ったりとか、恐竜博物館へ行ったり

とか、何か違う楽しみを見つけさせてあげようとしているけれども、夢と希望、まあ自分が持つのもいいんですけど、市とか大きいところがもっと与えてあげられたら、それはそれでいいのかなと思っている。前回、他の委員が、貧困の子どもに対して、全ての子どもにではなくて、学ぶ意欲のある子どもにとおっしゃったときに反対されたので、子どもの学ぶ意欲というのを周りが引き出してあげないと、というのもすごい印象に残っていて、だから夢と希望も誰かが与えてあげないと、子どもが自分で思いつく範囲を超えているところもあると思うので。その上で、ここで言っていることは、私は全部すばらしいなと思っている、でもそれがそれぞれの計画に落とし込まれたときに、この夢と希望を持ちとか、応援すると言っていることができているのかなというところの方が気になる。ニーズがあるから対応するとか、問題があるから解決するというよりは、市として子どもにこうなってほしいから、今はニーズがないかもしれないけれども、与えていくというか。自分の視点の範囲でしか話せないのでもうしても学童の話にどうしてもなってしまうが、私は小学校までの子は、みんなできるだけ学童に入ったほうがいいと勝手に思っている。そのマンションのエントランスで集まっている子とか、親が働いていると家に遊びに行ってはいけないとか、家に呼んではいけないと言われていた子どももたくさんいて、行き場がないのだろうなという子を、自分の子の友達とかでもよく見かけるので、もっともっと市が居場所を積極的に、ニーズがなくても用意して、行きなさいよみたいな、この理念に沿った取り組みがもっとふえたらいいなと思った。

【委員長】

与えるね。はい、ありがとうございます。

【委員】

皆さんの御意見を順番にお聞きしている中で、そうだな、そうだなと思ったのは、なかなか、はい、どちらも捨てがたいという気持ちに私も賛成だが、昨日も

滋賀県の障害者の県大会のほうに出させてもらった中で、御本人さんたちが自分たちのいう夢や希望を決議文として発表されるというコーナーもあって、それもすごく誇らしく見させてもらっていて、応援したいなというふうに、私たちも、もっと頑張らないといけないなという気持ちになった。そこで発表されている方は、すごく生き生きされているけれど、その場にも来られていない方たちのことを思うと、また一方でこっちの応援するまちとか、何かもうどっちがいいのかと、すごく思うわけである。私の個人的な意見なのだが、やはり安心して自分を表現できるという受け皿があることが、私としては望むというか、そうだったらいいなというところがあるので、それに対する公の受け皿なり、公というのは市だけではなくて、市民感覚であったり、他の人と違うことが変なことというふうに受け取られない、何かそういう社会であってほしいなという思いがある。

【委員長】

ありがとうございます。だから、非常にこのキーワードというか、言葉選びというのは難しくって、やっぱりこの夢と希望という言葉はどう考えていくのかということで、それぞれの意見を今、事務局に聞いてもらったので、何もきょう決める必要はないので、またそういうのも参考にさせていただきたいと思うが、僕は、どういう社会をつくりたいのかと言ったときに、確かに現場で子どもたちをよく見られている方からすれば、今の子どもたちは夢とか希望というのを持ってないよとか、語らないよと言われるし、それも一つの現実だと思うけれど、そういうことを語れない社会を良しとしているわけではない。本当だったら、その子どもたちがちゃんと自分の夢と希望を語れて、それを実現できるまちをつくりたいというのが本来の目指すべき方向である。だから、そういう今の子どもたちが夢や希望を語れないのだったら、語れないからこそ、それを語ることを目指すべきじゃないのかというふうに僕は思う。だから、その他のところに書いてあります、例えば子ども・若者が夢と希望が持てるとか、持つ、持たない

ということよりも、やっぱり自分の言葉で何かうまく話しを聞きながら、子ども一人一人がそういう夢とか希望を語れるまち、そういう思いを込めるのであれば、この夢と希望という言葉というのは、うまく生かしながら使ってもいいのではないか。一人一人が夢と希望を持たないまちが今の草津なんだというのであれば、我々がいろんな形で応援をしながら、子ども一人一人がちゃんと夢と希望を持ったり、あるいは自分の口でそういう夢と希望というものを語れるそういうまちを最終的には目指していこうよという、そういう思いを込めるということだったらどうか。今のこの現状、現実というのを皆さんから聞けば聞くほど、逆にそういう子どもが、これから未来を生きる子どもたちが、夢も希望も語れないまちってしんどいよなって思う。もし、それが現実なんだったら、微力ながらも一人一人が、子どもたちがこの草津で生活する中で、あつ僕こういうふうになりたい、こうしたい、ああしたいというふうに語ってくれる、語れるようなまちづくりというものを目指す中で、一人一人の子どもたちや若者が自立して、自分なりの生き方を実現していく、そういうものになっていくんじゃないのかなというふうに思っている。

【委員】

今、いろいろ聞いていて、これを考えてくれたので、これを活かしてというか、ちょっと文法的に私も余り知識がないのですが、「子ども・若者が自分らしくいき、夢や希望をもてるまち草津」というのはどうかなと思う。

【委員長】

ああ、これを入れかえてね。

【委員】

そうすると、これだと夢や希望が先にあるという前提になるので、まずはその人が生きることができて、その結果何か夢や希望が持てたらいいかなというのを、今、ちょっとひらめいたので。いろいろ聞いていて、これを活かして取り入れる

のだったらどうかかなと思った。

【委員長】

それもありだな。だから、このままだと逆に言ったら、いろいろ聞きながら、夢と希望を持たないと自分らしく生きれないという話になるが、そうではなくて、自分らしい生き方というのは、もう多様にあって、それが必ずしも夢や希望と直結するものでもないのかもしれないが、まずは、そういう自分らしい生き方というのがあって、その中で何かしら自分たちが夢や希望というものを語れたらいいよねという、そういう思いが込められる。事務局、みんなの意見聞いて、ちょっと次までにまた考えてもらえるか。

【事務局】

いろんな御意見をいただいて、夢というと大きな、例えば甲子園へ行きたいとか、そういう夢を聞いてしまうと、自分としては、いや、そんな大それたものはないという気持ちになって、夢がない、そこまで人に語れるほどの夢がないというような感じなのかなと思っている。自分はこうしたいというのを夢と表現してもいいのかわからない部分があるから、きつと言えないのかなと思う。この夢と希望というのが、少し大それた感じなので、自分らしくという部分を入れていて、自分らしくという部分は、自己肯定感についての御意見が前回の会議で出ていたので、いろいろな生き方がある中で、夢といってもいろんな夢が当然ありますし、それを自分として自己肯定感の中できっちりと持てるようにという意味である。目指すべき夢は、いろんな夢があるだろうが、語る語らないは別として、気持ちとしては持ってほしいなという思いもあるので、人に誇れる夢じゃなくても、自分らしい夢であれば良いし、先ほど、自分らしくのほうを強調するのに前に持ってくれば、という御意見いただいて、確かにそうかなと思った。私たちも、この部分はかなり詰めて話した部分で、委員さんたちの思いをどうやったらこの短いフレーズに入れられるかなと吟味してきたので、ここを入れかえたら思ってい

る。

また、このキャッチフレーズは、夢や希望を持っていないといった人たちにも受け入れられるような表現だったり、主役は確かに子ども・若者だけけれども、みんなが支えるという気持ちを表すこともすごく大切だなという話もあったので、前文の文章の中に、地域共生社会の考え方も入れながら文章全体を膨らませて、夢と希望という部分と、周りが支えるという気持ちの部分の部分を足しながら、2つの案を次回にお示しさせていただいて、最後詳細に御意見を賜るという形で持っていかせていただくのはどうか。

【委員長】

自分らしく生きるということに関しては、じゃあ、自分らしく生きるってどういうことなのという、そこら辺を文章でうまく表現してもらえたらと思う。この自分らしく生きるというところには、草津市としてはこういう思いを込めていまずというのを、前文の中に入れてもらって。一番シンプルなのは、子ども・若者が自分らしくいきるまちと言い切ってしまうと、草津市としてどういう思いを自分らしく生きるという言葉の中に込めているのかということの端的に前文で表現してもらったら、それで一番シンプルになると思う。そういう自分らしく生きるということの中に、夢とか希望という思いを込めてもいいし、要は自分が生きて、こうしたい、ああしたいという、そういう思いがそのまま実現できるということが表現できれば。この自分らしくをどううまく表現するか、そこに思いをどう乗せるか。「子ども・若者が」の次にどっちを先に持っていくか、このあたりからうまく組み合わせていくのであれば、自分らしく生きるということを全面に出して、その後に言葉をつける、つけないというのは、自分らしくという言葉の中どういう思いを込めるかということによる。

この言葉の中に全ての思いを詰め込むんだったら、もう自分らしく、あなたも私も、生きる、生きれるような、自分が思っている自分というものが出せる、実

現できるそういうまちになっているんだったら、それが一番いいよねということ
で。

そのあたりで、もう一回事務局のほうで、今日出てきたいろいろな意見を参考
にして、ただ共生まで入れるべきかどうかは、また焦点がぼやけてしまう気は少
しするが。支えるまちをつくるのか、でもやはり主役の子どもたちが、最後は自
分で切り開いていくべきもの。自分の生き方だから。そういうものであって、そ
の前提に支える、当然それを応援、支えるためにこの計画があるんだけど、支
えることと自分で選んで自己選択、自己決定で生きていくということを余り並列
させると、その思いというのがちょっとまたぼやけてしまうような気もするけれ
ども、そういうことも含めて出してもらい、次回、もう一回、市として、この言
葉の中にこういう思いを込めていますということをつけてもらって、出してもら
うといいのかなというふうに思うので。

【事務局】

わかりました。

【委員】

1つだけ。その2つ目の地域共生社会の考えを含めた案のキャッチフレーズだ
が、僕、何回も読んでいて、「子ども・若者が、すべての人と支え合い」という
のが、何か言葉として日本語といたら失礼な話だけれど、私だけだろうか、そ
んなふう感じているのは。子ども・若者がすべての人と支え合い。何か、全て
でないといけないのかということが一つあったのと、支え合うというのは大事だ
と思う。だから、ここの下の文章には、支え合うという言葉も使ってあるし、支え
るという言葉もあるし、例えば簡易な言葉かもしれないが、互いを認め合いとか、
子ども・若者が人とつながりとか、それぐらいのすべてというのと、ちょっとかな
りハードル高いなという部分と、この日本語自体が、僕にはどうも、ここで読点
が出てくるのがちょっと、わかりにくい。僕の感想です。

【委員長】

言われると何かわかりにくい。ただ、もう一つ言わせてもらおうと、今、草津市も確か、多文化共生のプランをつくっている最中で、多文化共生のプランのキーワードに大抵は、認め合い、支え合うという言葉が出てくる。そういう意味では、多文化共生のプランとかなり重なってくるのではないかという心配もあるので、できたら支え合うというのは大切けども、まず、一人一人が自立していくということを我々は支えるという意味では、できれば、自分たちがどうするのか、どうなりたいのかということの主にして、子ども・若者を主役に据えたほうがよいと思う。これは希望として。皆さん、今の御意見を含めて検討をお願いいたします。

では、ここで時間をとってしまいましたけども、とても大切なことなので。

残りに行きたいと思いますが、残ったのは、3の基本計画の重点的な取組についてということで、事務局から願います。

③第5章 本計画の重点的な取組

【事務局】

<資料5に基づき説明>

【委員長】

説明があったけれども、この点についてはいかがか。重点取組として2点、切れ目のない支援、そして、このステップアップ。生活で、まず日常生活から、これ多分同心円状に広がっていくことになると思うが、まず自分自身の生活があって、そして地域の中に居場所があって、徐々に徐々にそうやってステップアップする中で、最終的に社会の中に溶け込んでいけるというような、そういう段階的

な支援ということを考えていこうという、そういうことだというふうに思うが、何かこれに関して、御意見とか、いやいや、こういうことも必要じゃないかというようなことがあれば、お願いします。

イメージとしては、皆さん、御理解いただけるか。イメージとキーワードがうまく連動すれば、一番良いが。

ただ、自立という言葉を使っても、また自立とは何かという話になってくる。

何か御質問とか、あるいはこの言葉わからないよとか。よろしいかな。

では、最後に計画の推進に向けてということで、御説明をお願いします。

④第6章 計画の推進に向けて

【事務局】

<資料5に基づき説明>

【委員長】

ありがとうございます。この部分に関して、御質問、御意見があったら、お願いします。

同じような事を言っている、さっきの子ども・子育て計画の図と、またこっちとは違う。むしろ、こっちの47ページのほうを応用して、子ども・子育ての方をつくったほうが良いのでは。他の委員が言ったように、家庭というものがまずコアになれば。子ども・子育ても、家庭のそれぞれの子育てというのがまず第一にあって、それを支えていく上で、学校や企業や市民団体というのがうまく連携しながら、いわば家庭での子育てというものをうまく支えていくことで、豊かな子育てというのが可能になるという点では、イメージとしては、この47ページの家族というものがあって、それを見守ったり、支えたりするネットワークとして地域のさまざまな機関と学校というのがあって、それ全体をコーディネー

トをしたりとか、ネットワークの要として全体を調整していくところに、最終的には市の役割があってという、そういう同心円状の中で、ネットワーク、連携、協働ということを考えていくような、この47ページでもこれでパーフェクトというわけではないが、イメージとしては、こちらのイメージの方が多分皆さんもわかりやすいのではないかと思います。図として、まずこのような核があって、それを支えるものとして、学校とか企業とかいろんな人たちがそこを見守ったり、支えたりしながら、最終的には、市がそれをうまくまとめ上げていく、調整していくというふうな。だから、そういうイメージで図のほうも考えていただくとよくなるのかなというふうには思うが、ほかの方、いかがか。何か、せっかくなので、あれば。どうですか、よろしいか。役割、そして推進体制、子ども・若者が夢と希望をもち、いきるまちは、後日変わってくるだろうと。なかなか難しいよね、一言で表現するというのが、プロでもない限りは。

大体、御理解いただけたか。

これに関しては、こういう方向で、図については、今日出た意見を参考にして、ちょっと修正をしてもらって、よりよいものをつくっていただくというふうなところで、一応、これで一通りのお話は済んだよね。

では、少しだけ時間が過ぎてしまいましたけども、事務局のほうへお返すする。

3. 閉会

<事務局より閉会宣言>